様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３３００４４

研究課題名（和文）近・現代アメリカ論の系譜―学際的・比較論的視点から

研究課題名（英文）Exploring the Intellectual Foundations of American Society --From Interdisciplinary and Comparative Perspectives

研究代表者
西崎　文子（Nishizaki, Fumiko）

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：６０２３７６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域研究としてのアメリカ研究と、政治学・政治思想史研究とを架橋し、それぞれの専門性を維持しながらも、「総体」としてのアメリカ理解を深化させることを目的とした。研究代表者・研究分担者は、近・現代のアメリカ論の思想的な系譜を次の三つのアプローチを用いて解明した。１）宗教、保守主義、ポピュリズム、人種論など、アメリカを思想的に理解するときに鍵となる概念を分析した。２）政治科学や国際政治理論などの学術・研究分野や、国際法思想、外交論などに見られる特徴を分析した。３）日本や中国、ヨーロッパの知識人や政治家が捉えたアメリカ論を分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to explore the intellectual foundations of American society --both contemporary and historical -- by incorporating the findings in the field of American Studies with those in the fields of history, politics, political thought, and international law. The members, while pursuing their own projects in their respective disciplines, sought to undertake one of the following research agenda: 1) analyzing the key concepts indispensable in understanding the intellectual foundations of American Society, such as religion, conservatism, populism and racial politics 2) analyzing the characteristics of the American approaches to academic disciplines, as exemplified in political science, the theory of international politics, international law and diplomacy, 3) analyzing the interchange of ideas between the academics and public intellectuals in the United States and in other parts of the world, for example in China, Japan and Europe.

研究分野：アメリカ政治外交史

キーワード：アメリカ外交論　第一次世界大戦　国際法思想　国際秩序観　戦争と平和

１．研究開始当初の背景

本研究開始にあたっての問題意識は、アメリカ合衆国を「思想」的存在として捉えるという旧来のアプローチを、今日の学術状況に照らして再構築することにあった。近年のアメリカ研究では、アメリカとの距離感が縮まり、情報量や史資料が増え、また政治学や国際関係論の分野などで研究の手法が日米で共有されることによって、アメリカ理解が洗練され、精緻化されてきた。他方、その反面として、アメリカを学際的・包括的に捉える試みが希薄になっていることも否定しがたい。このような理由から、地域研究としてのアメリカ研究と、政治学・政治思想史研究を架橋し、断片化するアメリカ理解を今一度統合し、同時代的なアメリカ理解に寄与するのがこの研究プロジェクトの目的であった。

２．研究の目的

本研究では、近・現代アメリカ論の思想的な系譜をたどることによって、複合的・総合的なアメリカ像を探ることを目的とし、次の三つのアプローチを用いた。ｉ）宗教意識や政治的・社会的保守主義、ポピュリズム、人種論などアメリカ理解に欠かせない概念の分析、ii）アメリカにおける政治科学や国際法思想の学問的系譜と外交理念の変遷の検討、iii）日本や中国、ヨーロッパの知識人によるアメリカ論などの分析である。多面的、かつ相互に連関のあるアメリカ像を描き出し、現代アメリカに見られる保守主義やポピュリズムの台頭や、単独主義から国際主義へと大きく振幅する外交の背景にある歴史的・理念的連続性および変化を説明するパースペクティブを獲得することを目的とした。

３．研究の方法

研究活動の中心となったのは、研究代表者の所属する東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構附属のアメリカ太平洋地域研究センターである。このセンターを中心に、海外からの招聘者を招いての研究会やシンポジウムなどを開催し、研究成果や資料の多くも附属の図書館に納められた。研究活動の概要およびシンポジウムの成果は、センター発行の紀要やニューズレターに発表された。

本研究の対象となったのは大きく次の 2 つの時代である。

(1)第一次大戦期から両大戦間期の時代

ウィルソン大統領の登場によって、一方ではヨーロッパとアメリカ、あるいはアメリカとアジア・アフリカ地域の間で、「新外交」の理念が激しい論争の対象となり、他方では、第一次大戦を経て国際法秩序の構造的な変換がみられる中でアメリカの国際法学内部での学問的・実践的な変化がおこった。また、それと呼応しながら日本や中国、欧州の知識人の間でも国際政治観をめぐる厳しい論争が展開される。このような問題群が研究テーマとなった。

⑵第二次大戦後から 1950 年代まで

国際政治秩序および法秩序に関する議論は第二次大戦を経て継承されるが、「脱植民地化」や「民族自決」の概念の再定義とアメリカの立ち位置の変化が、アメリカの軍事化と結びついて新たな研究テーマとなる。近年のグローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーの接近法に留意しながらも、その中でのアメリカの軍事・経済力の突出と、冷戦時代の「熱戦」に見られる非対称性に着目することが課題となる。同時に知識人や市民運動など、グローバル・ヒストリーの中で着目すべき歴史の主体に光を当てる研究手法の開拓も目指された。

４．研究成果

本研究プロジェクトは、「太平洋関係のなかのアメリカと日本―歴史からの問い」「それぞれの戦後―アメリカとベトナム」などのシンポジウムを上述のアメリカ太平洋地域研究センターと共催した。また、米国からはヴァージニア大学歴史学部のオリヴィエ・ザンズ教授と、ラトガーズ大学歴史学部のマイケル・アダス教授を招聘するなどして研究交流を行った。さらにハーヴァード大学教授ジェイムズ・クロッペンバーグ氏を招聘してのセミナー“Barack Obama and Democracy in America”も共催した。これらの研究交流や学会活動・出版活動を通じて得られた研究成果は次のとおりである。

（１）アメリカ外交理念について

ウィルソン外交について、第一次世界大戦や対ヨーロッパ外交のみならず、中南米、とくにメキシコ政策を分析することによって、国際秩序や民族自決といった概念がアメリカで形成されていった過程を明らかにし、欧州やアジア・アフリカで考えられていた概念との間に根源的なずれが存在したことが確認された。パリ講和会議等でのアメリカ外交の「失敗」は、理念と現実との齟齬だけでなく、理念そのものの特殊性に内包されていた。

（２）アメリカ外交史への接近法について

冷戦期から現在にいたるアメリカ外交史ヒストリオグラフィーの変容を通じて、アメリカ外交論の「断片化」を明らかにした。イデオロギー的、構造的接近法からジェンダー、人種、文化に着目する接近法への変化は、分野の多様性を生み出すと同時に、Daniel Rogers の指摘する age of fracture を象徴する。それは外交史・外交論に「分断」をもたらすことも示された。

（３）日本の知識人によるアメリカ論

第二次世界大戦をはさんだ日本における国際政治理論は、欧米とくにアメリカの政

治・外交理論の影響を強く受けたが、戦前から戦後の日本社会への内在的な批判を問題意識の根底に据えることによって、時代を超えた論争と対話とを可能にしていたことが明らかにされた。それは、保守派と目された清水幾太郎、高坂正堯からリベラル派の丸山眞男、坂本義和まで、リアリズムを踏まえた現状分析から政治理論を構築するという姿勢が貫かれていることに由来する。

（4）国際法思想とアメリカ

アメリカ国際法学では両大戦間期に大きな思想的転換が起こり、これが国際連合設立以降の国際法秩序への序章となったことが明らかにされた。とりわけ Quincy Wright や Manley Hudson らは国際法の革新を提唱し、戦争の違法化のみならず、国際的人権擁護やより平等主義的な国際法レジームの確立を準備する法理論を展開した。

（5）アメリカ論と宗教

アメリカ政治における宗教（右派、原理主義）の役割の重要性は近年つとに指摘されているが、遡って世紀転換期のポピュリズム、革新主義、1920 年代の保守主義の理解における宗教的接近法の重要性が確認された。またアメリカ外交における宗教的要因を、イデオロギー的観点のみならずエキュメニカルな宗教運動の影響を踏まえて分析することの意義も明らかにされた。Andrew Preston ら政治・外交史からのアプローチに加え、アメリカにおける福音主義の思想的影響と政治社会運動とを有機的に結びつけることが今後の課題となる。

（6）冷戦期以降のアメリカ外交論

研究協力者であるマイケル・アダス教授は、ベトナム戦争を第二次大戦後アメリカ外交の「結節点」として捉え、この戦争の暴力性と、それに伴う甚大な人的・物理的コストとは、アメリカ外交に内在する構造的な要因であることを示した。さらにグローバル・ヒストリーが世界諸地域を結びつける視点をもたらすと同時に、個人の役割を埋もれさせるという両義性を持つことが明らかにされた。

（7）フィランソロピー、財団とアメリカ

研究協力者のオリヴィエ・ザンズ教授は、トクヴィルが Democracy in America で指摘した「結社」の伝統が、アメリカにおけるフィランソロピーの歴史にどう具体化されているかを明らかにした。アメリカ社会の特質とされる「贈与」の文化が「財団」という制度的な枠組みを与えられ、公民権運動や貧困撲滅などの社会政策との相互作用を通じて 20 世紀のアメリカ社会に多大な影響を与えたことが示された。

（8）まとめ　政治学、国際政治学、歴史学、国際法学の分野での成果から明らかになるのは、1970 年代以降のアメリカの知的状況の「分断化」である。同時に、グローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーの接近法による「架橋」の試みも、従来のアメリカ理解に根底的な疑念を投げかけている。そのような「断片化」や「相対化」が、政治・社会の現状認識に対する「分断化」をもたらすことになるのか、さらなる検討が課題となろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 29 件）

①酒井哲哉、「歴史的文脈の中の国際政治理論」、国際政治、査読無、175 号、2014、pp.70−83

②酒井哲哉、「未完の新左翼政治学？―丸山真男と永井陽之助」、現代思想、査読無、42 号、2014、pp.124−131

③篠原初枝、“International Law and World War I”、 *Diplomatic History*、査読有、Vol.38、2014、pp.860-893、DOI 10.1093/dh/dhu025

④篠原初枝、「国際法学から国際政治理論へ―1930 年代後半から 1950 年代のアメリカ学界」、国際政治、査読有、175 号、2014, pp.27-40

⑤増井志津代、「マサチューセッツ湾植民地における『カルヴァン主義的倫理』再考―Robert Keayne, “The Last Will and Testament”(1653)を中心に」、アメリカ・カナダ研究（上智大学）、査読無、31 号、2014、pp.23-47

⑥Adas, Michael、“Aftermath of Defeat: The Enduring Costs of the Vietnam War”、*Pacific and American Studies*、査読無、Vol.4、March 2014、pp.7-20

⑦Zunz, Olivier、“Alexis de Tocqueville – A Life in Letters and Politics”、*CPAS Newsletter*、査読無、Vol.14 No.1、September 2013、pp.1-3

⑧酒井哲哉、「永井陽之助と戦後政治学」、国際政治、査読有、175 号、2013、pp.70-83

⑨古矢旬、「米国衰退論の現在−背後に潜む文明論的問い掛け」、外交、査読無、12 号、2012、pp.52-59

⑩篠原初枝、「国際連盟の遺産と戦後日本」、アジア太平洋討究、査読無、20 号、2012、pp.149-166

⑪西崎文子、「ウッドロー・ウィルソンとメキシコ革命―『反米主義』の起源をめぐる一考察」、思想、査読有、1064 号、2012、pp. 118-138

〔学会発表〕（計 24 件）

①篠原初枝、「第一次世界大戦と国際法学」、第一次世界大戦と東アジアの国際秩序をめぐる会議、2014 年 10 月 19 日、香山飯店（中国北京市）

②西崎文子「history と historiography のあいだ―新外交をめぐる考察」、日本アメリ

カ史学会、2014 年 9 月 27 日、亜細亜大学（東京都武蔵野市）
③西崎文子、“A Story of Self Government: A Contested Legacy of Wilsonian Diplomacy”、2014 年 9 月 5 日、ヴァージニア大学歴史学部（米国ヴァージニア州シャーロッツヴィル）
④篠原初枝、“Drift toward Empire? The Trajectory of American Reformers in the Cold War”、Workshop on Empire and International Law、2014 年 4 月 8 日、Finnish Institute in Berlin、（ドイツ連邦共和国ベルリン市）
⑤西崎文子、「『ニューカマー』としてのアメリカ合衆国―国際関係史の視点から」、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻第 21 回公開シンポジウム、2013 年 6 月 29 日、東京大学（東京都目黒区）
⑥増井志津代、「アメリカ史研究の現在を考える―初期アメリカ研究の視点から」、日本アメリカ史学会第 25 回例会、2012 年 12 月１日、東京大学（東京都目黒区）
⑦杉田敦、「政治の『周辺化』や『脱領域化』にどう応えるか―政治思想・政治理論研究の課題」、日本政治学会、2012 年 10 月 6 日、九州大学（福岡県福岡市）
⑧古矢旬、「アメリカ例外主義の政治的機能をめぐって」、日本アメリカ史学会、2012 年 9 月 22 日、一橋大学（東京都国立市）
⑨古矢旬、「現代アメリカ・リベラリズムの死と再生」、第 5 回ヘボン＝渋沢記念講座シンポジウム、2012 年 7 月 26 日、東京大学（東京都文京区）

〔図書〕（計 24 件）
①遠藤誠治・遠藤乾編、『安全保障とは何か』、岩波書店、2014、306（分担執筆部分 pp.1-30, 279-306）
②川崎修、『ハンナ・アレント』、講談社学術文庫、2014、452
③酒井哲哉編著、『日本の外交第３巻　外交思想』、岩波書店、2014、311（分担執筆部分 pp.281-311）
④西崎文子、「集団的自衛権とアメリカ外交」奥平康弘・山口二郎編『集団的自衛権の何が問題か』、岩波書店、2014、327（分担執筆部分 pp.237-249）
⑤杉田敦編著、『岩波講座・政治哲学 4 国家と社会』、岩波書店、2013、244（分担執筆部分 pp.vii-xi, 3-26）
⑥篠原初枝、*US International Lawyers in the Interwar Years: A Forgotten Crusade*, Cambridge University Press, 2012, 248.
⑦斎藤眞・古矢旬、『アメリカ政治外交史第二版』、東京大学出版会、2012、353

６．研究組織
(1)研究代表者
西崎　文子（NISHIZAKI, Fumiko）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号　60237691

(2)研究分担者
古矢　旬（FURUYA, Jun）
北海商科大学・商学部・教授
研究者番号　90091488

酒井　哲哉（SAKAI, Tetsuya）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号　20162266

杉田　敦（SUGITA, Atsushi）
法政大学・法学部・教授
研究者番号　30154470

篠原　初枝（SHINOHARA, Hatsue）
早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授
研究者番号　30257274

中條　献（CHUJO, Ken）
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号　50227336

李　暁東（LI XiaoDong）
島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号　10405475

遠藤　誠治（ENDO, Seiji）
成蹊大学・法学部・教授
研究者番号　60203668

中野　勝郎（NAKANO, Katsuro）
法政大学・法学部・教授
研究者番号　70212090

川崎　修（KAWASAKI, Osamu）
立教大学・法学部・教授
研究者番号　80143353

増井　志津代（MASUI, Shitsuyo）
上智大学・文学部・教授
研究者番号　80181642

(3)研究協力者
Michael Adas (MICHAEL, Adas)
ニュージャージー州立ラトガーズ大学・歴史学部・教授

Olivier Zunz (ZUNZ, Olivier)
ヴァージニア大学・歴史学部・教授